OTSU CITY MUSEUM OF HISTORY

大津歴博だより

2009
No.76

企画展
戦　争　と　市　民
ー湖国から平和へのメッセージー

平成21年7月25日（土）～8月30日（日）【月曜休館】

兵隊姿の子ども　昭和11年撮影　真常寺（末広町）参道にて
岩見さだ子家蔵

大津市歴史博物館

企画展

戦争と市民

――湖国から平和へのメッセージ――

展示概要

大津市と聞いて真っ先にイメージするのは、琵琶湖や比叡山、神社仏閣、近江八景など観光や風光、信仰といった言葉ではないでしょうか。しかし、今から六四年前、昭和二〇年まで、大津は軍隊の都市としての顔を持っていました。昭和期には、大津連隊区司令部・大津海軍航空隊・滋賀海軍航空隊・陸軍少年飛行兵学校・天虎（てんこ）飛行研究所・比叡山上の幻の特攻基地など、軍の関係施設が市内各地に設置されていました。本展では、大津海軍航空隊などで訓練に使われていた九三式中間練習機の模型や、東洋レーヨン（現東レ）に落とされた原爆の模擬爆弾パンプキンの実物大模型、戦時中の家庭生活を表した居間の復元などによって、当時のありさまを分かりやすく紹介します。

日の丸寄せ書き　写真1

兵隊として戦争に行くことは、名誉なこととされ、各地で祝賀行事が行われた。日の丸の寄書は、出征兵士の武運長久を祈り、親戚や友人、町内の人々が寄せ書きしたもので、千人針とともに戦地に持っていった。

戦時教育紙芝居　写真2

昭和一七年、大政翼賛会宣伝部が制作した戦意高揚のための紙芝居。「進め一億火ノ玉父さん」と題したこの紙芝居は、満州国建国から太平洋戦争まで、アメリカを赤鬼、イギリスを青鬼に見立てて、それをやっつけるという物語になっている。

衣料切符　写真3

戦時下では、さまざまな生活物資の購入が制限された。衣料切符制度は、昭和一七年から実施され、衣料品に点数を付け、国民は与えられた点数の枠内でしか衣料を購入できなかった。

瀬田国民学校絵日記　写真5

瀬田国民学校五年智組の児童たちが描いた絵日記。昭和一九年四月から二〇年三月までの一九一日分が残されている。写真は、空襲警報の発令で、防空頭巾をかぶって帰宅する風景。空に舞っているのが敵機。文章には「いつ爆弾が落ちるかもしれません」と不安な心情が書かれている。

第四期国定教科書　写真7

大正七年（一九一八）の第三期国定教科書改訂に続き、昭和八年、第四期改訂が実施され、「ススメススメ、ヘイタイススメ」といったように、小学校の教育現場に戦時色が影を落としていった。

子供茶碗　写真8

戦争が始まると、子供茶碗にも、たとえば桃太郎だけだった図柄に、銃を持った犬や猿など家来の動物が加えられたり、銃をかつぐ兵隊の行進などと、戦争の影が忍び寄ってきた。

陶製ガスバーナー　写真9

戦時下では、武器生産の原材料とするため、寺院の梵鐘から日常生活に使用する道具類まで、あらゆる金属製品が、戦争協力の名のもとに供出を迫られた。写真は、陶製のガスバーナー。火の元は大丈夫だったのだろうか。

防毒面　写真11

戦時中、銃後（日本国内）の備えとして、空襲に際して家庭で使用した防毒マスク。口元に繋ぐ缶に解毒する薬剤が入っている。

観覧料　一般　五〇〇円（四〇〇円）、高大生　四〇〇円（三二〇円）、小中生無料

※（　）内は一五名以上の団体、大津市在住の六五歳以上の方・大津市在住の障害者の方の割引料金。

主催　大津市・大津市教育委員会・大津市歴史博物館・京都新聞社

後援　ＢＢＣびわ湖放送・ＮＨＫ大津放送局・エフエム滋賀

1　日の丸寄せ書き　木村四郎家蔵

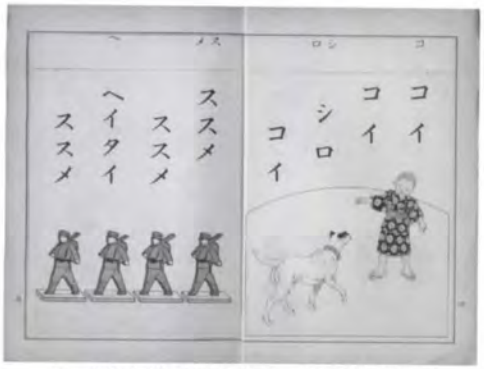
2　戦時教育紙芝居　本館蔵

3　衣料切符　金子素輔家蔵

4　祝応召提灯　坂東正健家蔵

5　瀬田国民学校絵日記　西川綾子家蔵

6　防空演習ビラ　田上郷土史料館蔵



7　第四期国定教科書　人見晃司家蔵

8　子供茶碗　個人蔵

9　陶製ガスバーナー　個人蔵

10　少国民の友　相楽貞喜家蔵

11　防毒面　個人蔵

12　防衛食容器　個人蔵

13　慰問用絵葉書コドモの新体制　伊藤元彦家蔵

学芸員のノートから
逢坂山トンネルの軍需工場・記憶の断片

戦時中、米軍による空襲の被害を避けるため、各地で工場の疎開が実施された。軍需生産の一翼を担っていた三菱重工業もその一つであった。昭和二十年五月、京都の桂にあった同工場が、東海道線の路線変更によって使われなくなっていた旧逢坂山トンネル内に疎開したことは、断片的には語られているが、その実態は不明な点が多い。当時、勤労動員されていた京都府立女子専門学校の生徒さんたちも、逢坂山トンネルのある大谷町まで通勤することになった。トンネル内という劣悪な環境のなかで、工作機械と格闘していた女専の皆さんが、貴重な証言を残されている。企画展「戦争と市民」の事前調査で、大谷町かねよの先代社長鍋谷正男さんや女専の方々にお話を伺った。以下は、その聞き取りである。

大谷町に新設された「逢坂の関記念公園」の近くに、当時かねよ経営の逢坂山ホテルがあった。そのホテルの一階の窓から、鍋谷正男さんのお父さんがラジオを大音量で流し、玉音放送を聞いた。かねよの人々と、トンネル内で働いていた女専の生徒さんたちも並んで聞いた。鍋谷さんたちは、天皇の声を聞くのは初めてで、意味が分からず、まさか日本が負けるとは思っていなかったので、もっと頑張れ、と激励されているのかと思ったという。女専の生徒さんたちは、放送の内容が分かったようで、中には座りこんで泣く人たちも居た。その様子を見て、戦争に負けたということが理解できた。

当時、京阪電車は大谷駅では停まらず、朝晩の一時間ずつくらい停車して、そのとき、電車が停まるたびに大勢の生徒さんや工員さんが降りたり乗ったりしていたという。トンネルに女専の生徒が勤務しはじめたのは五月十九日だった。元女専の方々の記憶によると、トンネル内部の照明は裸電球で、天井からは絶え間無く地下水が落ちて足元を流れるため、床面には簀の子が敷かれ、工作機械も、それを操作する生徒も簀の子の上で作業したという。履物は雪駄だったが、地面はぬかるみ劣悪な環境であった。また、停電でもしようものなら、トンネル内は真っ暗になったという。ただ、鍋谷さんたちは、戦時中はトンネルには近寄れなかったと記憶されており、軍事機密として扱われていたのだろう。戦後になってトンネルに入るとまだ、たくさんの旋盤が奥の方までずらーっと並んでいたという。

鍋谷さんの記憶では、かねよの「鱗の間」は和風の建物で、その六畳くらいの広さの部屋を軍需工場の診療所に使っていたという。診療所には、医師と看護婦が一人ずついて、医師は鍋谷さんの自宅の二階に住んでいた。医師はアメリカで生活していて、日本に帰ってきたとき太平洋戦争が始まったので帰れなくなったのだともいう。

逢坂山ホテル　鍋谷正男家蔵

この、断片的な証言によっても、逢坂山トンネル内の軍需工場の様子を伺うことができる。企画展「戦争と市民」の事前調査は、展示資料の調査とともに、こういった聞き取り調査による事実への接近が重要な仕事となる。

（学芸員　樋爪　修）

第77回 ミニ企画展 大津の仏教文化10
西教寺の地獄十王二使者図

7月28日(火)～8月23日(日)

比叡山では平安時代の恵心僧都源信以降、極楽往生思想とともに六道輪廻の思想の中心地として多くの地獄図や十王図が描かれました。その比叡山の麓に所在する西教寺は、『眞盛上人往生伝記』に「慈恵大師経始の道場、恵心先得建立の伽藍」とあり、良源や源信ゆかりの浄土教、念仏の寺院として知られ、多くの宝物が伝来しています。

今回は、地獄を司る十王と二使者を表す図としては古例に属する西教寺本を十二幅すべてと、地獄思想に関わりの深い、我が国でも珍しい盂蘭盆経説相図（朝鮮時代・十六世紀）を展示します。

第五閻羅王

第78回 ミニ企画展
葛川明王院文書Ⅱ

8月25日(火)～9月23日(水・祝)

重要文化財「葛川明王院文書」は、延暦寺の別院である明王院に伝来した古文書で、平安時代から江戸時代にいたる、四三三六通の膨大な古文書群です。明王院は、天台回峯行を開いた相応和尚が、苦行の末、生身の不動明王を感得した修行の地。毎年行われる「蓮華会」（太鼓回しで知られている）は、相応和尚の修行をたどるもので、聖地としての明王院が今も生きていることを痛感させられる伝統行事です。この古文書は、葛川に生きる人々の歴史を雄弁に語る貴重な証しです。研究が重ねられてきたのは、鎌倉時代後期の葛川の領域をめぐる伊香立との相論ですが、この古文書群は、こうした相論文書ばかりで構成されているわけではありません。回峰行に関する行者の活動を語る記録や、天台系の寺院で行われていた法会にまつわる資料も多く含まれています。今回のミニ企画展では、そうした資料も含めて、幅広い内容を持つ、葛川明王院文書の一端を紹介します。

熾盛光法指図（しじょうこうほうさしず） 鎌倉時代

大津市歴史博物館
〒520-0037 大津市御陵町2-2 ☎(077)521-2100
ホームページ http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp